

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

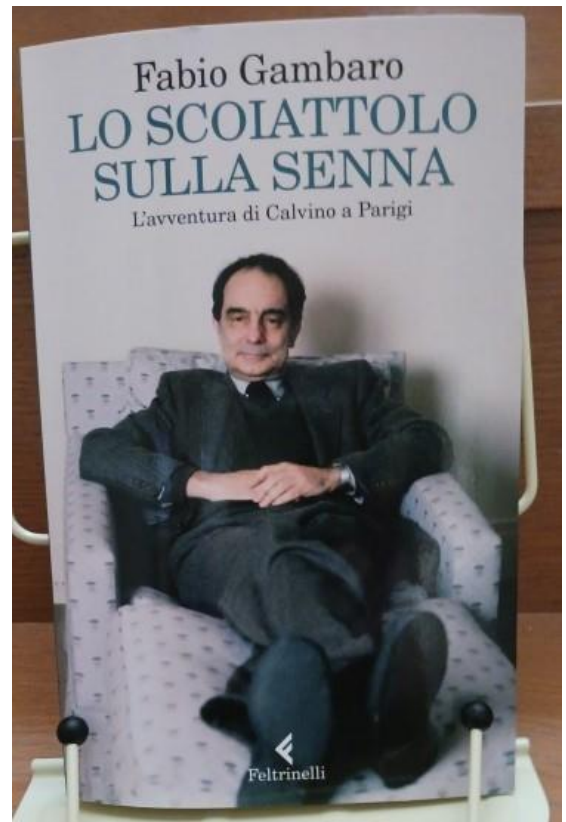
カルヴィーノとアーティチョーク④

パリの隠者 (1)

堤 康徳

カルヴィーノは、1967年から1980年まで、13年間にわたりパリで暮らした。この時期に出版された三つの小説『見えない都市』(72年)『宿命の交わる城』(73年)『冬の夜ひとりの旅人が』(79年)は、いずれも、カルヴィーノ後期の代表作である。レイモン・クノーやロラン・バルトといったフランスの名だたる知識人の知遇を得て交流を深めたことが、この時期のカルヴィーノの思索と創作に少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。パリに住み始めたカルヴィーノが、クノーの小説『青い花』(I fiori blu di Raymond Queneau nella traduzione di Italo Calvino, Torino, Einaudi, 1967)の翻訳に従事したことからふたりの親交は深まり、クノーらが1960年に設立した実験的文学グループ「ウリポ」の活動にも加わった。また、カルヴィーノは、1967年から69年にかけて高等研究実習院に通い、バルザックの『サラジヌ』を巡るバルトの講義を聴講したという(Fabio Gambaro, *Lo scoiattolo sulla Senna. L'avventura di Calvino a Parigi*, Milano, Feltrinelli, 2023, p. 59)。

パリという大都市について、パリでの生活について、カルヴィーノが肩の力を抜いて語った文章がある。「パリの隠者」(*Eremita a Parigi*, 1974)がそれである(これを表題作とするエッセイ集が、作家の死から9年後の1994年に刊行された)。このエッセイは、ルガーノ(スイスのイタリア語圏の町)のテレビ局によるカルヴィーノへのインタビューから書き起こされている。



「パリの隠者」は次のように語り出される。

数年前から私はパリに家を一軒もっています。そこで一年の一部を過ごしますが、これまでのところこの町は、私の書くものには現れていません。きっとパリについて書くには、そこから離れ、遠ざかる必要がありそうです。人がものを書くと、欠落、あるいは不在からつねに始め

るのが真実ならば。あるいは、より内部に入りこむべきでしょうか。しかしそのためには、若い頃からそこに暮らす必要があります。私たちの空想世界にかたちを与えるのが、成年になってからの場所ではなく、私たちの人生の初期の情景であるとすれば(Italo Calvino, *Eremita a Parigi*, Milano, Mondadori, 2009, p. 171)。

1967年6月、カルヴィーノは妻子とともに、ローマからパリに引っ越した。娘のジョヴァンナは2歳になったばかりだった。一家が居を定めたのは、セーヌ川南に位置するパリ14区、シャティヨン広場の4階建ての細長い家である。作家の書斎は最上階にあった。カルヴィーノにとってパリの自宅は、パリ中心部に位置しながら、辺鄙な田舎か孤島の一軒家と変わらなかった。イタリアにいるよりも、パリのほうが、執筆に集中できたことは想像にかたくない。「私の机は島のようなもので、ここでなくても、どの国にあらうがいいのです」とも述べている。

とはいえ、異国にあって、イタリアとほどよい距離にあることも重要だったのかもしれない。カルヴィーノによれば、その地区からは、オルリー空港までのアクセスがよく、トリノやミラノまで一時間ほどで到着できたという。カルヴィーノは、自らが顧問を務めるエイナウディ社の編集会議のため、毎月のようにトリノに出向く必要があった。また、1978年に亡くなるまでサンレモに暮らしていた母親エーヴァに会いに行くことも少なからずあっただろう。

ここで想起されるのは、『宿命の交わる城』における、絵画に描かれた隠者の分析である。この点についてはすでに、2016年2月号本コラムにおいて触れたので、そちらも参考にいただければ幸いである。カルヴィーノは、デューラーの版画「聖アントニウス」やレンブラントの版画「聖ヒエロニムス」が、砂漠やジャングルのなかにはではなく、都市の近くに描かれていることに注目したうえで、このように書いていた。

隠者の力は、都市からどれだけ離れられるかによって測られるのではない。都市をつねに視界に入れたまま、どれだけ短い距離で都市

と断絶できるかによって測られるのだ(Italo Calvino, *Il castello dei destini incrociati*, Milano, Mondadori, 2014, p. 108)。

パリの隠者カルヴィーノの日常は、書斎にこもりがちではあったが、毎朝、地下鉄4番線に乗り、サン・ジェルマン・デ・プレ駅で降りて、イタリアの新聞を買いに行く習慣があった。しかしそれは、ある場所から別の場所への移動にすぎず、自分はボードレールのような遊歩者(フラヌール)だったのではないとも述べている。

カルヴィーノは、パリの地下鉄がお気に入りだったようで、その理由を、次のような印象的なできごとによって説明している。

昨日、地下鉄に裸足の男が乗っていました。ロマでもヒッピーでもなく、私を初め多くの人と同じく眼鏡をかけた紳士です。新聞を読む姿はまるで教授のよう。考えごとをして、靴下と靴を履き忘れてしまった例の教授然としています。しかもそれは雨の日で、彼は裸足で歩いていたのです。ところが誰も彼を見ようとせず、好奇の目を向ける人もいないようでした。誰からも見られることがないという夢(II sogno d'essere invisibile)……。私は自分が誰にも見られていないと思えるような環境に身を置くと、とても居心地がよいのです(*Eremita a Parigi*, cit., p.174)。

パリは、カルヴィーノにとって、巨大な百科事典のような都市でもあった。博物館や映画館だけではなく、通りに並ぶ商店にも、「百科事典の項目や新聞の紙面」のように、知識と情報が書きこまれているという。カルヴィーノはその一例としてチーズ店を挙げる。

パリには、すべて種類の異なる何百ものチーズを並べた店があり、どのチーズにも名前のラベルが貼られています。灰をまぶされたチーズ、くるみのチーズなど。それは、ある種の博物館であり、チーズのルーヴル美術館といえます(*Ivi*, p.176)。

このような文化の背景にあるのが、とりわけ、「分類と命名にたいする精神の勝利」だと指摘している。円熟期を迎えた作家にとって、パリはもはや冒険や探検の対象ではなかった。無数の情報が集積され、あらゆる物が収集されたこの町を歩くことは、カルヴィーノにとって、百科全書の本をめくることに等しかった。

パリは、カルヴィーノが妻エステル(Esther Judith Singer, 1925-2018)と出会った町でもあった。『不在の騎士』の仏訳出版のさいパリに滞在していた作家は、1962年4月1日、友人宅でロシア系アルゼンチン人の小柄な女性と知り会った。彼女はChichita(スペイン語でpiccolinaの意)という愛称で呼ばれていた。最初の結婚に敗れ、幼い息子マルセルを連れて、1954年にブエノスアイレスからパリに渡ったエステルは、英語とフランス語に堪能で、ユネスコなどの国際機関で通訳として働いていた。文学と芸術に造詣が深く、自らピアノを奏でるこの知的な女性に、カルヴィーノはただちに心を奪われる。

社会的で明るいエステルは、夫とは陰と陽のような関係だったと思われる。イタロの没後は数十年にわたり、作品の監修に精力を注ぎ、著作権の管理に目を光らせた。「なかには彼女を癡猛な番犬呼ばわりする者たちもいたが、そうせざるをえなかったのではないかと今は思う」(Berardo Valli, *Italo*, Roma, Ventanas, 2023, p. 31)。カルヴィーノ夫妻と親交のあった新聞記者の言葉である。

1964年2月末、ふたりはキューバの首都ハバナで、公証人立ち合いのもと結婚した。カルヴィーノが生地キューバに戻ったのは、このときが初めてである。キューバ革命から5年が経過した1964年の首都ハバナについてカルヴィーノは、まず目についたのが、「American way of lifeの残滓の急激な消滅」だったと後に追想している(バルセロナの文芸誌『キメラ』1982年12月号)。さらに、「テロルは去ったようだった。革命は、権威主義的圧力のねじを締めたり緩めたりしながら、『キューバの道』を模索する段階にあるように見えた」(Italo Calvino, *Saggi*, cit., pp. 2873-2874)と述べてい

る。しかし人々の生活は苦しく、食料は配給制で、必需品は闇市で入手せねばならなかったという。

キューバ旅行の主たる目的は、カサ・デ・ラス・アメリカス賞(premio Casa de las Américas)の審査員を務めることであった。カサ・デ・ラス・アメリカスは、ラテンアメリカの芸術家と作家を支援する目的で1959年に設立された施設である。ひと月ほどの滞在中、積極的に新聞のインタビューを受け、2度の講演を行うなか、私的な訪問の機会もあった。ふたりは、イタロが生後2年間を過ごしたサンチャゴ・デ・ラス・ベガス村を訪ね、農業試験場所長だった父マリオを知る人々から、暖かい歓待を受けたという。

産業省の執務室で会ったチェ・ゲバラも作家に強い印象を残した。カルヴィーノは、1967年10月のゲバラの死去にさいして、『カサ・デ・ラス・アメリカス』誌(1968年1月2月号)に「どんなことを私が書こうとも」と題された一文を寄せている。

私に返事をしたさいの、皮肉と同情のこもった彼の笑いがよみがえる。私は今ここで、本に囲まれた私の書齋に座っている。ヨーロッパの偽りの平和と繁栄のなか、私の仕事の短い合間を利用して、危険にさらされることもなく、あらゆる危険を自らに背負おうとしたひとりの男について書いている。彼は、かりそめの平和という虚構を受け入れず、自らと他者に最大限の犠牲を求めた男だった。今日犠牲を払うことを少しでも怠れば、明日さらに大きな犠牲の総額を支払うことになるかと確信していたがゆえである(Antonio Serrano Cueto, *Italo Calvino. Lo scrittore che voleva essere invisibile*, Milano, Mondadori, 2023, p. 300)。

ゲバラへの賛辞からは、危険と犠牲を顧みなかった革命家とは対照的に、平穏な環境で執筆にいそむ作家の後ろめたさを感じられる。しかし同時に、カルヴィーノがパリに住み始めてまもない時期に書かれたこの文章には、ゲバラの能動的生とは対極にある観照的生を選んだ隠者の覚悟もまた、はからずも表れていないだろうか。

(イタリア語講師)

*** パリ五輪の熱狂をきっかけに思う、
スポーツを程よく愛することの大切さ ***

山田 晃裕

2024 年、ただでさえ暑かった夏をさらに盛り上げたイベントといえば、やはりパリオリンピックだろうか。自国開催だった前回東京五輪と比較すれば時差もあり、毎日がオリンピック一色とはいかなかったが、まさに熱狂の 2 週間だった。日本を代表する各競技のアスリートたちの活躍には目を見張るものがあったが、同時にイタリア勢の活躍からも目が離せなかった。心を動かしたドラマが多々あった中で、心に深く刻まれた印象的なドラマを 2 つ紹介したい。

まずは、男子走り高跳びのジャンマルコ・タンベリ。東京五輪の金メダリスト(カタル代表だったバルシムと金メダルを分け合った)ということもあり今大会では開会式でイタリア選手団の旗手に抜擢されるも、セレモニー中にセーヌ川に婚約指輪を落としてしまうという波乱の幕開けとなった(なお、ユーモアあふれる婚約者への謝罪は SNS 上でも公開。日本のワイドショーでも取り上げられ話題となった)

予選を突破し決勝まで日が空くため一時帰国するまでは順調だった。しかし、調整期間中に腎臓結石を発症してしまう。渡仏すら危ぶまれる中で奇跡的な回復を見せパリへ舞い戻ったが、決勝レース前日に再びコンディションを崩して、現地の病院に救急搬送されてしまう。

なんとか退院して決勝に出場するもやはり本調子には程遠く、総合 11 位という結果に。試合後のインタビューで紡いだ言葉はとても心を打つものだった。

“Ho provato a dimenticare quello che era successo e dire a me stesso, gareggia, come se non fosse successo nulla.”

「起こってしまったことは一旦忘れて、何もなかったと思って闘えと自分に言い聞かせた」

“Nella difficoltà ho avuto questo pensiero di poter fare qualcosa di grandioso, proprio perché le persone mi spingevano a pensarlo”

「たくさんの人の後押しがあったからこそ、困難の中であれ何かを成し遂げられるのではないかという気持ちが芽生えたんだ」



【ジャンマルコ・タンベリ】

出典元: https://it.wikipedia.org/wiki/Gianmarco_Tamberi

良くも悪くも話題に事欠かなかった今大会。それでも最後まで自身と向き合い持ちうるチカラを絞り尽くした。納得できる結果ではなかったが、最後までものがき諦めずこの言葉に辿り着けるのもまた、スポーツの持つ価値である。

もう一つのドラマは、五輪初の金メダルを獲得した女子バレーボール代表チーム。中でも監督を務めたフリオ・ベラスコ(アルゼンチン国籍なのでここは敢えてスペイン語読みで)にスポットを当てたい。

決勝までの 6 試合で落としたのはわずか 1 セットのみ。驚異的な強さを見せたチームの指揮官は、“filosofo(哲学者)”の異名を持つ名伯楽である。

代表監督就任はなんと五輪開催のわずか 4 ヶ月前。1952 年生まれの 72 歳に白羽の矢を立てるといふ大胆な人事だったが、超短期でチーム改革を施し、世界の頂点にたどり着いた。

フォーカスが当てられるのは、彼が放つ言葉の数々である。哲学者の異名に違わず、本質を突く言葉をポンポンと投げかけてくる。以下は準決勝・トルコ戦後に勝利を収めた後のインタビューコメントを抜粋したものである。

“Ci dobbiamo divertire, perché è una cosa che non è mai successa: giocare una finale. E dobbiamo smetterla con questa storia dell'oro che manca, perché non se ne può più. Lo dico anche in difesa della squadra maschile. Guardiamo ciò che abbiamo, non sempre quello che manca, se no è una filosofia di vita negativa.”

「歴史上初めて決勝の舞台に立つのだから、この先の残された1試合は楽しんでやるべきだ。(準決勝で敗れた)男子代表の名誉を守るためにも言いたいのだが、金メダルに届かなかったという歴史とは、これを機に決別すべきでもある。足りないものばかりを見つめるのではなく、今の私たちが持ち合わせているありのままを見つめようではないか。さもなくば、ネガティブな人生の哲学を突き詰めてしまうだけになってしまう」



【フリオ・ベラスコ】

出典元: https://it.wikipedia.org/wiki/Julio_Velasco

彼の言葉はチームスポーツの持つ魅力、そこに生まれるジレンマや難しさを分かりやすく噛み砕いてくれる。その言葉の影響力はバレーボール界だけに止まらない。

その代表格が、現代サッカー界における知将の1人、ペップ・グアルディオラである。選手として長きにわたり FC バルセロナ(スペイン)で活躍し

た後、キャリア晩年をイタリア・セリエ A ではブレシアとローマで過ごした。ある日テレビ番組でいつも通り金言を授けていたベラスコ(当時は男子イタリア代表監督)を見つけ、感銘を受けたグアルディオラがすぐに電話を取り食事の約束を取り付けたというのは有名な話だ。

ベラスコに関するたくさんの記事・映像が世に出回っているが、細かな戦術について話しているものは少ない。指導者として必要なビジョン、選手同士が問題を解決することの大切さなどテーマはさまざまだが、マイクを片手に語っているものがほとんど。

彼の言葉を通じて得られる「気づき」はいつも本質を突いている。スポーツと縁遠い世界に生きる人にも勇気を与えるものだ。「スポーツでやってきたことは社会に出ても生きる」と常日頃から思って生きている人はたくさんいるはず。いい仕事の運び方、チームビルディングのあり方を学ぶ上でも、ベラスコの言葉は素晴らしい教材である。

時に、「日本人はサッカーが好きすぎる」と思うことがある。少年サッカー界隈でもプレー機会は増える一方。「うちの子、3 チームかけもちで週 6 回サッカーやってます！(自慢げ!)」なんて子どもも珍しくない。

しかし、幼いうちから他のスポーツに触れる機会を排除し、1つの物事に盲目的になってしまうことには懸念を感じる。ボールは蹴れるがキャッチボールができない子も増えた。運動能力の成長が歪(いびつ)になっている兆候そのもので、スポーツ指導者としては看過できない。この手の視野の狭さは、スポーツがもたらすよるこびや新たな可能性の分母を矮小してしまうことにもつながるのだから。

では、イタリアはどうなのか。

イタリアのスポーツ文化の象徴といえば、ピンク色の新聞でおなじみ“Gazzetta dello Sport”。遠い昔、初めてのイタリア旅で手にして驚いたのはその情報量。平均 40~50 ページのスポーツ専門の日刊媒体なのだ。確かにサッカー関連の記事がおよそ半分を占め、UEFA チャンピオンズリーグやセリエ A などトップコンペティションからアマチュアサッカーまで幅広く網羅されている。

しかし、他の競技に関する記事もページ数こそ少ないにせよ情報量としては十分。(サッカーを中心とした)スポーツ文化の土台が大きく、しっかりと社会に根付いていることを思い知らされる。

私に関わる AC ミランのクラブスタッフたちの中には、サッカー未経験者も少なくない。週末になればバスケットボールをプレーする者もいれば、テニス界の新星であるヤニック・シナー(彼も立派なミラニスタ)の応援に夢中な者もいる。

また、近年ヨーロッパでは、新たなラケットスポーツ「パデル」が大ブームとなっている。年齢・性別を問わないインクルーシブなスポーツで、コート建設ラッシュが続く。

AC ミランの慈善団体 “Fondazione Milan” が主催するチャリティー大会では、コスタクルタ、アルベルティーニ、ジダ、セルジーニョといった往年の名選手が一堂に会し、ラケットを手に笑顔でプレーする姿が世界中に配信されている。

サッカー界の頂点を知る彼らがボールを蹴らない姿が好意的に受け止められていたのだが、これと同じ反応は果たして日本でも起こりうるだろうか。

日の丸を背負ってワールドカップに出た選手たちの中にも、引退後はサッカー界と一定の距離を置く人は存在する。そんな彼らが例えば趣味のゴルフなどに没頭する姿を見ると、オールドファンはなんだか寂しく感じたり、「あいつはサッカーを捨てた」と嘆き節を並べたりしてしまうかもしれない。

イタリアは日本と比べればたしかにサッカー大国であるが、スポーツ文化としては競技間にある垣根は低いように感じる。個人レベルでも「サッカーが四六時中好きでなければならぬ」という義務感のようなものは存在しない。特定の競技に縛られることなく「いろんなスポーツを程よく愛している」のがよくわかる。

この感じは私にとっても心地よく、サッカーを溺愛しすぎないことでバランスをとりながら働くというワークスタイルにつながっている。程よい温度感で、ストライクゾーンを広く。サッカー指導者は専門性の高い仕事だが、そこに「俯瞰の目」と数々の「ちょい足しアレンジ」をもたらしてくれるのだ。

サッカーを愛しすぎ & 研究しまくり突き詰めるだけであれば、きっと何度も煮詰まり壁にぶつかってつまづいていたことだろう。他のスポーツはもちろん、子どもたちのいろんな遊びからインスピレーションを受けて、日々のトレーニング設計に活かしているのは私の強みかもしれない。

日本全体で基礎的な運動能力の低下が叫ばれる昨今、幼少期にたくさんのスポーツに触れてみる「マルチスポーツアクティビティ」への注目も高まっている。健康増進はもちろんスポーツの価値を通じた人材育成まで、スポーツが持つ可能性はさまざま。新たな成長の可能性を求めるなら、視野を広げることはやはり大切。その際に、1 つの競技を溺愛しないことは決して悪ではないと思いたい。

パリ五輪の熱狂を経て、スポーツを俯瞰で捉え、程よく愛することの大切さをあらためて噛み締めることができた。そして、ちょっとした夢ができた。

「フリオ・ベラスコを日本に呼ぶ」

バレーボール界の名将も御年 72 歳。チャンスは無限にあるわけではないが、彼の言葉の魔力をたくさんの人に知ってほしい。いち個人としても、哲学者の言葉にじかに触れる通訳がしてみたいのだ。スポーツ指導者が競技の垣根を越えて学ぶ機会とし、スポーツ指導者のみならずたくさんの人に「目からウロコ」となる言葉と気付きを届けられる機会になると強く信じている。

四十路のおっさんが夢を掲げたところで、本稿を締めることとする。

(AC ミランアカデミー愛知)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>